

他では味わうことができない 日本最大級のインド・フェスティバルを開催。

2011年9月24日、25日の二日間、東京の代々木公園などで「ナマステ・インド2011」が開催された。19万人を集める日本最大級のインド・フェスティバルだが、その華やかさの裏側には、並々ならぬ苦勞も隠されている。

シルクロードのバザールに 紛れ込んだような雑多な喧噪が魅力。

ナマステ・インドは2011年度で19回目の開催で、イベント名に使われている「ナマステ」とは、インドのあいさつの言葉である。年々、規模が大きくなり、メイン会場の「代々木イベント広場」と第二会場の「たばこと塩の博物館」には二日間で19万人の人が集まった。

パンフレットには日本最大級のインド・フェスティバルと銘打ってある。主催するNPO法人日印交流を盛り上げる会 代表で、ナマステ・インド実行委員長 長谷川時夫



19万人を集める大イベントになったナマステ・インド



インド・フォークアートの広場にもたくさんの人が訪れた

さんは次のように語る。

「なにをもって最大というか、数だけではありません。『まるごとインド』をテーマとしてあらゆる面での交流を図り、共に学びあおうというスピリットはどこにも負けないと思います」

ナマステ・インドでは、音楽、美術、舞踊、映画、講演などの文化イベントが数珠つなぎに展開され、そのまわりをインドテイやインド料理、アジア料理などのレストラン、占星術や物品販売店が取り囲む。アイヌ舞踊や和太鼓演奏などもあり、シルクロード時代のバザールに紛れ込んでしまったような雑多で喧噪にあふれた空間だ。

これだけ集客力のあるイベントになると、出店を希望する企業なども増えてくる。今年は大手企業がステージのスポンサーになった。逆に平等を心がけてはいるが、古くから参加している店舗からは不平を言われることもある。拡大した故の悩みだ。



会場の一角に設けられたインド・フォークアートの広場

そのうえ、今年はイベント自体を模倣する別イベントも現れた。しかし、長谷川さんは「模倣しても続かない」と冷めた目で見ている。

食べ物だけのイベントでは人が集まらず、この賑わいを再現しようとするれば、相当規模のコストがかかりすぎるからである。ナマステ・インドは多くの参加者を募るために出店料金を抑えており、毎年運営は厳しい状態が続いている。ステージの設営コストを抑えるために、実行委員長の長谷川さん自らが運転して新潟県から機材を選び、大工を連れてくる。

19万人が参加するお祭りは、強い信念がなければ続けられない。

雪深い山奥の美術館がイベントの原動力。

バザールの一角にAJOSCが助成した「インド・フォークアートの広場」がある。ガネーシャ（象の顔をしたヒンドゥ教の神様）像に出迎えられて進むと、地面からは砂でできた仏像が浮き上がる。テラコッタ製の馬や象、女神が並ぶ。竹細工でできた飛行機なども珍しい。子どもたちに大人気なのは等身大の象の置物である。乗ることはできないがさわり放題。

長谷川さんが館長を務めるミティラー美術館のアトリエで描かれたミティラー画も展示され、作家がその場で実演してみせた。米を溶いて発酵させた絵の具で描くミティラー画はインドの宗教芸術だ。しかし、長谷川さんは宗教などにとらわれない新しいテーマを表現する美術品としての可能性を追いかけている。貧困にあえぐインドの村の生活の糧とするためだ。

新潟県十日町市の山奥にインドの絵画を一堂に集めるミティラー美術館があり、ナマステ・インドの事務局もここにある。廃校を利用したこの施設は冬の間、深い雪に覆われ、夜の来訪者は月だけだ。

「この雪がいいのです」と長谷川さんは語る。

常識で考えれば不便。しかし、そのおかげでコストをかけずに大きなスペースが使える、作品を保管できる。インドの芸術家たちも長期間滞在でき、作品づくりに没頭できる。国境や地域を越え、さまざまな人々と語らってきた

担当者より



**AJOSCの助成で
素晴らしいイベントを
開催できました。**

ナマステ・インド
実行委員長
長谷川時夫さん

AJOSCの助成により「インド・フォークアートの広場」も、見栄えのある展示が実現しました。うわべではなく精神世界の深いところで交流するために必要な、イベント全体の核でもあると思っています。AJOSCのご理解に心より感謝いたします。

長谷川さんだからできる発想である。

「今の日本はもう曲がり角を越えています。東日本大震災は、これまでの利便性や画一的な快楽を求めることの限界を教えてくれたでしょう。もっと精神的な喜びや進化、多様性を求める時代なのです。インドとの交流はそのヒントになるはずですよ」

2012年は日印交流60周年でもあり、ナマステ・インドも20回目を迎える。「インド・フォークアート」が、イベントの収益から成り立つよう、さらに力を入れたいと長谷川さんは考えている。



ミティラー画を描く様子